

項目… 小川軽舟著『小川軽舟集』書評

題名… 地平に立つて

轍 郁摩

【本文…27字x80行】

高野槇春月さらへのぼりけり

平成二〇年

軽舟主宰（以下、軽舟）の句の中で最も好きな句である。

茶席の本席の床には禅僧の一行物が好まれるが、この俳句が大書された軸を拝見したい。弘法大師・空海の結界、両界曼荼羅の伽藍配置。春月は、太陽系・大宇宙へと遡り、ビツグバン以前の無窮世界へと連想が広がる。

軽舟は「この句を短冊に書くのは気分がよい。」と述べている。すらすらと書くさまが、見えるようである。俳句を志し、生涯に短冊に書ける句が十句も持てれば幸であろう。

さて、『小川軽舟集』のあとがきによれば、「これまで出した句集『近所』『手帖』『呼鈴』『朝晩』『無辺』五冊から六十句ずつ、計三百句を選んで自註を付した。」とあった。

三百句と決めた時、五句集から平等に六十句ずつ選べるだろうか。常人はその出来栄えを勘案して若書きを減らし、最新句集からが多くなるだろう。軽舟が、律儀に自制心をもって選び終えたことにまず驚きをおぼえた。また、三行書き、六十六文字以内の自註が実に簡潔。これは、効率的に、合理的に、心情を断ち切る強さが無ければできない。

霾るや星斗赤爛せしめつつ

昭和六三年

小川軽舟を意識した初巻頭句である。名前が俳号であるこ

とはすぐ察知できる。しかし、「軽舟」と自称するなど、かなり年配と思っていたら、びつくりするほど若く、東大法学部卒の俊英と知れば、二度びつくり。俳句で「星斗赤爛」など、よほど語彙が豊富でなければ思いつかないだろう。

芭蕉の「物の見えたる、光いまだ心に消えざる中にいひとむべし」とばかりに、よなぐもりにより北極星や北斗七星が赤らんで見えるさまを「せしめつつ」と押し込んでくる。

湘子が漢語を使えと教えた時期と重なるかも知れないが、ただ事ならざる記憶力と造語力の持主に違いない。

闇寒し光が物にとどくまで 平成一六年

十六年後には、こう詠んでいる。軽舟の身体には、この光と距離（時間）と場所が刻まれているのだろう。

唐代の李白の漢詩、〈白帝城〉を思い出して欲しい。

朝あしたに辞す白帝 彩雲の間 千里の江陵 一日に還かえる

兩岸の猿声 啼いて住やまず 軽舟已すでにに過ぐ 万重の山

軽やかな小舟は、すでに通り過ぎていったと書かれている。

心臓へかへる血潮や去年今年 平成二〇年

掲句には「生きている限り心臓に休みはない。」としか書かれていない。しかし「心臓に」ではなく「心臓へ」である。心臓に向かつて自分の体内を巡る血液のように、人生もまた途上にあり、一年一年と過ぎようとも死ぬまで休みはないと覚悟し、終生を俳句と生きようとの決意表明とも読める。

親指はただおろおろと春の暮 平成二三年

原子炉の無明の時間雪が降る 平成二三年

親指の句には「三月十一日、東日本大震災。私は大手町の職場にいた。携帯電話のダイヤルを押す親指は、おろおろする私自身でもある。」と自註あり。しかし、作者の説明、あ

るいはこの年号が無ければまず理解できない。つまり自分のための日記俳句とも言える。それでも代表句として書留めておこうとするのが軽舟の律儀さところだわりの無さなのだろう。そして、同年であつても、少し落ち着きを取り戻すと「原子炉の無明の時間」と捉え、煩惱に囚われた人間世界の時間の長さ、汚れを忘れ隠そうとする今の「雪が降る」時が対比されている。

ソーダ水方程式を濡らしけり

平成九年

自註に「中学校の教科書に採用された句。」とあつたが、私は大学の学食の野外テーブルを思い浮かべていた。そこでは、学生たちのかなり高度な微分方程式やシュレディンガー方程式、はたまた世界一美しいとされるオイラーの公式あれこれへと想像が膨らむ。ソーダ水でノートの端が濡れようと、彼らの論争は尽きない。

天体のわたる曲線林檎置く

平成一四年

奥坂まやの「万有引力あり馬鈴薯にくぼみあり」ほどの衝撃ではなかったが、机上に描かれた運動曲線の一点に赤い林檎を置くと、たちまち宇宙へと視点が上昇し、太陽と共に惑星たちが螺旋軌道で銀河空間を進んでいる映像が思い浮かんだ。「林檎落つ」では話にもならない。

林檎は、イヴからアダムに渡された毒リンゴ、あるいは青い地球だったかもしれない。

五分後の地球も青しあめんぼう

平成一六年

昭和三十六年、軽舟が生まれた二ヶ月後、人類初の宇宙飛行士がガーリン少佐が「地球は青かった」の名言を残した。カラーテレビ普及前、ニュース映像もモノクロだった。

はて、この五分後はどこから来たのだろうか。地球終焉まで

の腕時計の五分単位の文字盤だろうか。「あめんぼう」は、
藤田湘子の「あめんぼと雨とあめんぼと雨と」の句を意識し
つつ、天あめと地球が響き合う。五分後もその後も、人間世界の
終りが来ても、地球は在り続けると信じているに違いない。
彼の視点は宇宙から地球へ降り、一匹の虫たちへも、生死
を越えて見届けようとする地平に立っている。

備考…出典ほか、考察

小川軽舟集のページ

高野槇春月さらにもぼりけり 平成二〇年作 P 7 3

霾るや星斗赤爛せしめつつ 昭和六三年作 P 6

闇寒し光が物にとどくまで 平成一六年作 P 5 2

心臓へかへる血潮や去年今年 平成二〇年作 P 7 2

親指はただおろおろと春の暮 平成二三年作 P 8 8

原子炉の無明の時間雪が降る 平成二三年作 P 9 2

ソ―ダ水方程式を濡らしけり 平成 九年作 P 2 1

天体のわたる曲線林檎置く 平成一四年作 P 3 9

五分後の地球も青しあめんぼう 平成一六年作 P 4 8

万有引力あり馬鈴薯にくぼみあり 平八年三月号

あめんぼと雨とあめんぼと雨と 平九年七月号

李白の〈早発白帝城〉（七言絶句）二案あり

題の「早」は「つと」と読ませ「朝早く」の意味

起承転結の押韻から、「住」が良いかと判断しました。

旺文社文庫『中国詩三千年』藤堂明保 P 1 2 0

A案 朝辞白帝彩雲間 千里江陵一日還

兩岸猿声啼不住 軽舟已過万重山

朝日文庫『中国名詩集 美の歲月』松浦友久 P 3 5 5

B案 朝辞白帝彩雲間 千里江陵一日還

兩岸猿声啼不**尽** 軽舟已過万重山

なお、原稿では『小川軽舟集』俳句制作年の「作」を削除。

旺文社文庫『中国名詩集 美の歲月』松浦友久 P 3 5 5

朝日文庫『中国名詩集 美の歲月』松浦友久 P 3 5 5

朝日文庫『中国名詩集 美の歲月』松浦友久 P 3 5 5

朝日文庫『中国名詩集 美の歲月』松浦友久 P 3 5 5